



令和3年度 特別展(第39回)

源氏物語と大友吉統

大分市歴史資料館

ごあらわし

『源氏物語』は紫式部が平安時代に書いた、わが国古典文学の最高傑作です。

本展覧会では、この物語の名場面を豊臣秀吉の御用絵師狩野光信が率いた工房で、弟子たちが描いたとみられる当館所蔵の源氏物語絵二十五枚すべてをご覧いただき、今も多くの人を魅了してやまない『源氏物語』の世界へ皆さまを誘います。

これらの源氏物語絵は、『源氏物語』全五十四帖のそれぞれの名場面を絵にした五十四枚の一部であり、本来は今からおよそ四百年前に制作された一双の屏風に描かれたものです。

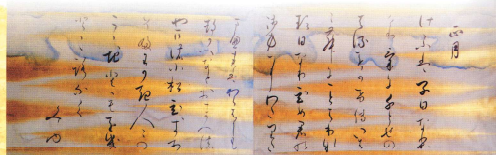
今回、その姿を想像できるように屏風の模倣を作りました。この屏風に描かれていた残り二十九枚の幻の源氏物語絵の内、この度二枚が初公開となります。

また、『源氏物語』の一節を戦国大名大友吉統が季節に合わせて遊び詰めた「十二月言葉手鑑」も三〇枚すべてをご覧いただき、『源氏物語』を題材にした当館所蔵の資料を余すことなく紹介いたします。

最後になりましたが、本展覧会に快くご出品いただきました所蔵者の方々、並びにご指導ご協力を賜りました各位に心からお礼申し上げます。

令和三年十一月六日

大分市歴史資料館



第一章

大友吉統が選んだ源氏物語

室町時代には絵巻や扇画、屏風などに源氏物語絵が描かれるようになります。土佐派や狩野派などの有名な絵師が源氏絵を描くことで、「源氏物語」は武家の必須の教養として文化的権威を求めるだけでなく、政治的な権力を石版するものになりました。

当時、大友吉統は秀吉より「吉」の一字を賜り吉統と改称しています。和歌に造詣が深い吉統は、秀吉が天正十六年（一五八八）四月に京都の聚楽第に後陽成天皇を抱き、和歌の会を開いた際にも一首詠んでいます。

また、吉統は同年九月二十九日には京都にあつて『源氏物語』の一部を季節に合わせて厳選し、三〇枚にも及ぶ紫雲紙の料紙に目書き書き添えています。吉統が選んだ『源氏物語』の一部は、『源氏物語絵制作の手引き』『源氏物語絵詞』に紹介された物語の名場面で、偶然の一致ではないようです。



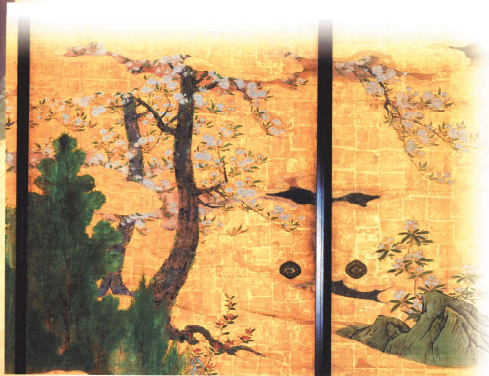
第二章

狩野光信の配下で 制作された源氏物語絵

当館所蔵の二十五枚の源氏物語絵は、秀吉や家康の御用絵師として有名な狩野光信（一五八一―一六五二）の画風が色濃く残るものです。光信は狩野永徳の嫡子で、織田信長や豊臣秀吉、そして家康をはじめ徳川家代々の御用を担った狩野派を代表する絵師の一人です。

永徳の跡を継いだ光信は、中国由来の水墨画を基調とし伝統的な唐絵（漢画）の技法に、和の濃彩の大和絵を取り込み、雅やかな源氏物語に調和した繊細優美で繊やかな彩色画を創出した絵師として高く評価されています。

当館所蔵の源氏物語絵は、その特徴を持つ全図でも数少ない大変貴重なものです。



第三章

源氏物語屏風の再現

当館所蔵の源氏物語絵は本来、六曲一雙の屏風に『源氏物語』本文全五十四帖から一場面ずつを描く「源氏物語五十四帖回屏風」と呼ばれるものでした。

その大きさは各隻の縦が一六〇cm程、横が二〇cm程の屏風であつたとみられます。屏風は紙本金地着色で、華やかな金色の画面に、源氏雲と呼ばれる特徴的な金雲を立体的に描き、五十四枚の源氏物語絵を区切っています。胡粉を盛り上げて描かれた金雲は三重の列点文を縁に連ね、その内側にも胡粉で小さきまな精四形の雲形が表現されています。

今回の展示では、当館所蔵の源氏物語絵を中心に解体前の屏風を至物大に再現し、優美で雅やかな威容を皆さまに体感していただきます。



トピック

お殿様所有の狩野派の屏風

大分市の特徴ある歴史が残した大変貴重な屏風が、船場に保管されています。この度、所有者の許可を得て六年振りに公開いたします。その屏風は市指定有形文化財「浪宗之丸屏風（厳島神社蔵）」です。浪宗之丸とは江戸時代の熊本藩主細川氏の御船で、参勤交代で江戸に向かうために豊後鶴崎（大分市）の港に置かれた絢爛豪華な大型船です。

その船屋形（藩士の居室）の窓礼を飾った特注の屏風がこれ、一雙の屏風に厳島神社の春と秋の賑わいをそれぞれに描いています。厳島に集う人びとの姿をたおやかに、そして確実な筆遣ひで表現し、大きな金箔を貼り合わせた金雲を画面一杯に糊引かせ、上質な群青色の岩絵の具を使って相ノ瀬の海を色鮮やかに描くその画風からは、江戸時代はじめ頃を代表する狩野派の一流の絵師による作品であることがうかがえます。



第四章

光り輝く姫君たちの物語

『源氏物語』には数多くの個性豊かな姫君たちが登場します。物語では各巻の中心をなす人物として描かれています。この姫君たちは華やかな平安朝の時代の中で、出生、死別、出家など様々な場面において個性を輝かせました。そして移りかわる季節の香りや自然の草花も物語に彩りを添えています。姫君たちの人生は光君の栄華と共に、千年を経て読み継がれてきた『源氏物語』の主幹を織りなすものあり、十二単を纏った姫君たちの艶やかな姿や平安絵巻の舞台である雅やかな座敷の室礼は、延々と描き継がれてきた色彩豊かな源氏物語絵の魅力となっています。

